



若い先生へ ＝開業して思うこと＝

さくもと泌尿器科・皮フ科 佐久本 操



開業してちょうど1年（平成20年9月3日開業）になった。開業準備は、病院勤務を兼ねながらで大変であったが、開業してからも外来患者数に一喜一憂し、スタッフとの関わり方など、小さいクリニックながらも経営者になって経験のない新たな悩みを抱え、壁にもぶつかる。医師にとって、患者さんの数は、自分の評価であり、大学病院や病院勤務時代と比べ、開業してさらに気になる。病院勤務時代は、今は身にしみて大切だと思う接遇の研修を受け（させられ）た。ところが開業して、注意・指導する方。立場変われば、考え方も変わる。患者さんの接し方も変わったかと思う。大病院のブランドがないために、当院のような小さなクリニックでは、患者さんは苦情も意見も言い易いであろう。困ることは多い。

以前、ある雑誌で某大学医学部教授が書いた「医者患者を選べない」のエッセーを読んだ。大学教授に限らず医者（若い先生でも）は、誰でも思い知らされ、いやな経験の一つや二つあるいはもっと多くお持ちであろう。患者さんは、具合が悪いと、家族・知り合いの評判を聞いてあるいは、建物の立派さ？で病院（医院）を決め受診する。もし、気に入らなければ、別の病院（医院）に鞍替えするか、病院であれば初めの担当医が外来日でない日に受診する。しかし、医師側は、この患者さんとは合わないと思っても拒めないのである。常識が欠けた医師が多いと前総理大臣は言われたが、患者さんにも常識のない、態度の悪い方はいる。医療事故などをマスコミが大きく取り上げ、医療不信に陥った結果かもしれない。開業してなお更、患

者さんとの接し方を考えるようになった。当院では、初診時の問診表に当院に来られた理由のアンケートを取っている。「通りがかりに知った」が約半数。当院が道沿いにあることで、立地条件が良かったと喜んでいる反面、私の評判は？と心配にもなる。しかし、「家族・知人から聞いた」が、次第に増え25%を超えた。これは、うれしい。話は戻るが、診療での苦労は経営も含め、勤務医時代より増えた気がする。

困った例①：薬を処方すると、薬局では薬の説明用紙に副作用が書かれている。情報開示の昨今、困ることがある。メーカーの責任問題から、めったにない副作用まで書かれており、それを理由に患者さんが服用を拒否する。ある疾患の薬には、副作用の頻度がわずかにもかかわらず、同系統薬にはすべて書いてあるものだから、別の薬剤に変えづらく困る。副作用の頻度も書いて欲しいものだ。インターネットで調べあるいは知人から聞いて、自分で病気を診断し、薬剤まで決めてこられる患者さんがいる。その説明で時間がかかり、納得してもらうのに苦労する。その患者さんのご希望の薬では効果に問題がある。説明がいつもより長くなるとこちらも疲れる。次の患者さんは待たされたと不機嫌になる。誠意を尽くしたにもかかわらず、患者さんが不満顔になったりする。丁寧なつもりインフォームドコンセントが、かえって医療不信になったのではないか。私の力が足りないのか患者さんが悪いのか考えてしまう。言う通りにして治らなければ藪医者の烙印。藪にもなれないとのことでタケノコ医者という言葉もあるそうだ。

困った例②：腫瘍マーカーが徐々に上がり始めた前立腺癌患者さんの話だが、このままの治療では悪化するので、別の薬に変更しますと説明しても、インターネットや薬の本などで副作用を調べ尽くし、それが心配だと拒否された。民間療法も受けていると隠さずに話してくれる。セカンドオピニオンを勧めても、先生を信用しているから？とそれも拒否。家族は本人に任すと了解しているが、はたしてこれでいいのかと悩んでしまう。

若い先生でも、このような経験おありでしょう。先の某教授は、困った患者さんには獣医の気持ちで自分を抑えろと書かれていた。咬まれても、感謝なくとも我慢して診療するのだとの内容であった。まだ、私は未熟なのだろうか。咬まれるのは御免である。しかし、患者さんに勇気づけられたり、勉強になったことは多々ある。

開業して、病院勤務時代より、患者さんの話を聞く時間を取るよう努力している。患者さんがまだ少ないこともあるが。「大きな病院や大学病院から開業した医者は、それまで勉強ばかりして、話も通じないと思ったさー」とか「開業する先生は、経験の少ない若い医者と思ったよ。結構年くってるねー」など、気軽に話してもらえるようになった。嬉しいことである。患者さんには、ワンダーリングし、別のク

リニックで治らなかったと受診する方もおられ、俄然私が治してあげようと燃えることがある。反面、当院から他院に移られる方もおられることであろう。そうならぬよう日々勉強も知識の習得も疎かにしないよう、また診療に納得いただけるよう努力している。

とりとめなく書いてきたが、最後にやっと若い先生に言いたいこと。私は、医師になり四半世紀も過ぎ、自分を振り返ると、医師として早く一人前になりたいとがむしゃらであった研修医時代、実験結果のなかなか出ない大学院時代、関連病院に出向しこき使われ、田舎の国立病院一人部長として派遣され怖い思いをしたローテーター時代、大学病院にもどり、診療・研究・学会発表に時間が足りないとドタバタした大学病院時代、沖縄にもどり勤務医になり部下を持ち、業績を上げることや指導にも苦労した時代と、それぞれの時期に失意や挫折は多くあった。失敗や挫折が人を育て養うものだと思うが、まだまだ自分は未熟だと思うことは数多くある。「少（わか）くして学べば壮にして為すことあり、壮にして学べば老いて衰えず、老いて学べば死して朽ちず」（佐藤一斎）。医師として、常に前向きで努力すべきなのである。ともに頑張りましょう。

